『比較日本文化学研究』第 10 号（2017）

論　文

日中説話における類話への考察

――『竹取物語』と「斑竹姑娘」の対比研究を中心に――

唐　　植 君

湖北第二師範学院講師・広島大学大学院文学研究科博士課程後期

Investigations of similar folk stories between China and Japan
—Focus on The Tale of the Bamboo Cutter and The Girl from Mottled Bamboo

TANG Zhijun

Abstract: The Tale of the Bamboo Cutter（Taketori Monogatari）is called "The ancestor of tales", as it is the oldest one in Japan. The author and the year it was created are unknown, but it has a high status in the history of Japanese literature. The Girl from Mottled Bamboo（Banzhu Guniang）is an old story that spread in Sichuan Tibetan areas of China, and is extremely similar to The Tale of the Bamboo-Cutter in many respects: the birth from bamboo, the problem of the proposed topic, the figures and story line. Therefore, it has drawn the attention of Chinese and Japanese scholars and has created controversy. This article focus on research activities and results regarding these two stories, pays important attention to the representative results of the comparative study dating back to the 1970s, and investigates the problems and deficiencies in previous research.

Keywords: Tale of the Bamboo Cutter, The Girl from Mottled Bamboo, Similar stories, Comparative research

はじめに

『竹取物語』はかなによって書かれた最初期の物語の一つで、『源氏物語』に「物語の出て来はじめの祖なる竹取翁」と書かれたように、日本最古の物語と言われる。『竹取物語』は竹取の翁が光る竹の中から発見した少女のかぐや姫を巡る奇譚で、作者と成立時期は未詳である。これまでの研究によると、約 9 世紀後半から 10 世紀前半頃成立したとされる。『竹取物語』は日本の文学史上での地位が高く、長く日本人に愛されている説話である。かぐや姫の

「末裔」と呼べる登場人物は枚挙に暇がない。かぐや姫的な性質のことを「かぐや姫性」と呼ぶ術語もあるほどであり、のちの文学作品にこれほどの影響力を与えた物語は他に『源氏物語』を数える程度であろう[1]。現代においても、「かぐや姫」というタイトルで、絵本・漫画・映画・アニメ・音楽など様々な形で人々に受け入れられている。例えば、2013年に高畑勲監督・スタジオジブリ制作のアニメ映画が劇場にて公開されもした。さらに、かぐや姫号という高速バス、『輝夜姫』という交響組曲もある。伊勢光が述べた通りに、『竹取物語』は「日本的」な心象やものの考え方といったものをある程度反映していると考えられるのではないか。

ところで、「斑竹姑娘」というチベット族の民話がある。この民話は民話集『金玉鳳凰』に収められている。『金玉鳳凰』は田海燕が中国の少数民族のチベット族に広く伝わっている民話を収集し、整理してから編纂したチベット族の珍しい民話集であり、一連の短いストーリーから成っている。絶対に口を聞かずに金の鳥を連れて帰るという使命を果たそうとする王子様と、口を開かせようと言葉巧みにおもしろいお話を数々語り聴かせるものいう鳥、という設定で進んでゆく。「斑竹姑娘」はその短いストーリーの中の一つであるのに、粗筋の面から見れば、『金玉鳳凰』に収録されたほかのストーリーとの繋がりがほとんど見られない。「斑竹姑娘」は中国の小学校四年生用の国文教科書A版に収録された。1971年には伊藤清司と百田弥栄子によって「斑竹姑娘」の日本語訳全文が発表された。その後、1977年には君島久子は『金玉鳳凰』の日本語訳を『チベットのものいう鳥』として出版した。

前文に述べたように、『竹取物語』は作者と創作時代が未詳なので、それを巡って研究したり、論争したりした学者が大勢いる。だから、1970年代、竹中生誕と難題求婚のモティーフから登場人物と粗筋まで『竹取物語』と極めて類似している中国の少数民族の民話「斑竹姑娘」が日本の民話研究者に発見されると、「斑竹姑娘」は『竹取物語』の研究構想に新たな視点と可能性を提供し、日本を始め日中両国における民俗学・民間文学の学者達に注目され、論争を引き起こす説話になった。そこで、本論はこの二つの説話を巡る研究に着目し、特に1970年代から今日にかけての対比研究の成果を中心にして、研究はどのように進んでいるか、学者達はどんな観点を持っているかなどの問題を明らかにしてみたい。従って、以上の纏めに基づいて、先行研究における不足点と問題点について考察することとする。

1.『竹取物語』と「斑竹姑娘」の伝本

1.1『竹取物語』

『竹取物語』の創作時期と作者を巡って、激しい論争が繰り広げられた。南波浩は26名の研究者の成立説を23種類に分け、表で示した[2]。各家の結果は差があるが、貞観から延喜にかけての交叉している時期、つまり9世紀後半から10世紀前半頃に成立したとされる。作者は僧侶階級の知識人で、かつては官吏生活の経験もあった人ではないかと述べた[3]。

『竹取物語』の題名については、今日に至って、一般的に『竹取』という略称、及び『竹取物語』という通称が一般的だ。南波浩（1960:5）が平安時代から江戸時代にかけて『竹取物語』の名称について説明した内容に基づいて、筆者で次の表1のようにまとめる。

（表1：『竹取物語』の題名）

時代	題名	出典
平安時代	『竹取の翁』	『源氏物語』絵合巻
	『かぐや姫の物語』	『源氏物語』蓬生巻・顕昭六百番歌合陳状
鎌倉時代	『竹取』	『無名草子』
	『たけとりのかぐや姫』	『風葉和歌集』
南北朝時代	『竹取翁』	河海抄
室町時代	『竹取』	『正徹物語』、久曾神本
	『竹取翁物語』	武藤本
江戸時代	『竹取翁物語』	前田善子氏蔵本、群書類従本、古活字十行本（元禄） 田中大秀の「解」（文政）

そして、『竹取物語』の本文の系統は、流布本系と古本系の二つの種類に分別できるとされている。流布本とは現在最も広く流布している本文であり、現在は一般的に古活字十行甲本を底本とするのである。中田剛直（1965:91-93）はそれまでの研究を踏まえて流布本を3類7種に分類したことによって、表2のようにまとめる。

（表２：『竹取物語』の流布本系伝本の分類）

分類		流布本系伝本
第１類	第１種	武藤本、平瀬氏旧蔵本、高山図書館蔵本
	第２種	加賀豊三郎蔵本、武田祐吉蔵本、久曾神昇蔵甲本
	第３種	前田善子旧蔵本、山岸徳平蔵本
第２類		島原候旧蔵本、北島家旧蔵本、度会正董書入本、荒木田久老書入本
第３類	第１種	蓬左文庫蔵本、吉田幸一蔵本、久曾神昇蔵乙本、静嘉堂文庫蔵丹羽嘉言筆本
	第２種	尊経閣文庫蔵本、戸川浜男旧蔵本、彰考館蔵金森本、群書類従本、内閣文庫蔵本、滋岡氏旧蔵本
	第３種	大覚寺蔵本、書陵部蔵霊元院外題宸筆本、書陵部蔵伊左米言本、徳本正俊蔵本、古活字十行甲本

古本系は今井似閑が元禄５年（1692 年）の刊本の奥書に、「ある古本を以て一校せしめ畢ぬ　互ニ見合セハ好本と成侍るへし　寶永四亥ノ八月　洛東隠士」とあることから名付けられた。古本系の本文は流布本系に対して、書入れ・校合の形で伝えられているから、流布本系より多数の異文があって、より古本の形跡を残すとされる。南波浩（1960:36-41）によって古本を３類４種に分類したことに基づいて、表３のようにまとめる。

（表３：『竹取物語』の古本系伝本の分類）

分類		古本系伝本
第１類		古写断簡
第２類		新井本
第３類	第１種	三手文庫本、桃園文庫太氏本
	第２種	光藤本、京大本、書陵部蔵恬斎書入本、桃園文庫書入写本、平瀬本、服部本

流布本と古本に基づいて、現代語訳本もよく見られる。『竹取物語、伊勢物語、土佐日記』（片桐洋一，福井貞助，松村誠一校注・訳，小学館 1983.2, 完訳日本の古典，第 10 巻）、『竹取物語』（星新一訳，角川書店，角川グループパブリッシング（発売）2008.7 改版角川文庫）、『竹取物語・伊勢物語』（北杜夫著，俵万智著；伊勢英子，林静一さし絵，講談社，2009.11.21 世紀版少

年少女古典文学館 / 興津要，小林保治，津本信博編;司馬遼太郎，田辺聖子，井上ひさし監修，第 2 巻)、『現代語訳竹取物語』(川端康成訳，河出書房新社 2013.11 河出文庫，［古 1-16］)、『竹取物語；伊勢物語：現代語訳』(田辺聖子著，岩波書店，2014.1，岩波現代文庫，文芸;234）などが挙げられる。『竹取物語』の粗筋は周知のものであるから、ここでは紹介を省く。

1.2『金玉鳳凰』と「斑竹姑娘」

『金玉鳳凰』は田海燕によって、1954 年に採集されたチベット族に伝わる民話に基づいて編著された民話集である。前述の通り、「斑竹姑娘」は『金玉鳳凰』に収録された一つの説話であるから、「斑竹姑娘」の伝本を調べるにあたり、『金玉鳳凰』の編著と出版の状況と合わせて考察しなければならない。『金玉鳳凰』と「斑竹姑娘」を収録した著作の状況は表 4 の通りである。

（表 4：「斑竹姑娘」の収録状況）

書名	出版年	編著者	篇数	説話の題名	出版社
『金玉鳳凰』	1957	田海燕	12 話	「斑竹姑娘」	中国・少年児童出版社
『金玉鳳凰』第一冊	1961	田海燕	41 話	「斑竹姑娘」	同上
『金玉鳳凰』1	1980	田海燕	39 話	「斑竹姑娘」	同上
『金玉鳳凰』2	1983	田海燕 芻燕	39 話	無し	同上
『金玉鳳凰』上・下	1992	田海燕 芻燕	39 話	「斑竹姑娘」	同上
…					
『チベットのものいう鳥』	1977	田海燕編 君島久子訳	39 話	「竹娘」	日本・岩波書店
『たけむすめ中国の昔話』	1981	君島久子訳	1 話	『たけむすめ』	日本・小学館
『現代語訳対照竹取物語』	1985	雨海博洋訳注	参考資料	「竹娘」	日本・光文社

『金玉鳳凰』は 1957 年に初めて中国の少年児童出版社から出版された。最初は 12 話だけ収録されたが、1961 年の刊本から 41 話に増え、1980 年には 1961 年の刊本から 2 話削られ、39 話で出版された。その後の刊本は基本的に

1980年の刊本に基づいたたものである。1977年には君島久子によって、『金玉鳳凰』のほぼ全文訳が、『チベットのものいう鳥』として刊行された。その中に「斑竹姑娘」は「竹娘」という題で、日本語に翻訳されている。

芻燕によると、1979年頃の田海燕は麻痺して動けない上に言葉も出せないほどの状態で仕事するのが難しくなり、田海燕の収集した資料を踏まえた続編の『金玉鳳凰2』を編集する仕事は芻燕に任せたそうだ[4]。その後、1992年に芻燕は別々に出版されている『金玉鳳凰1』と『金玉鳳凰2』を『金玉鳳凰』(上・下)に統合した。これ以降、『金玉鳳凰』に収録されている説話の数と内容は固定化されたと見られる。

2.『竹取物語』と「斑竹姑娘」に関する研究

『竹取物語』は作者と創作時期が謎のように未詳であるにもかかわらず、古代小説の最初期の作品として高い完成度と審美度を有している作品である。そのため、平安時代から数多くの学者が惹き付けられ、現代においても研究者達は『竹取物語』の素材と起源の研究に力を注ぎ続けている。

2.1『竹取物語』の起源と類話の前期研究

全文には、かぐや姫の竹中誕生の異常出生説話、かぐや姫の3ヶ月の急成長説話、育ててくれた竹取の翁を富み栄えさせる長者説話、求婚者へ難題を出す求婚難題説話、求婚説話、昇天する羽衣説話、富士山の地名由来の地名起源説話など、多様な要素が含まれているとされる。従って、「斑竹姑娘」が発見される以前、学者達は既に数多くの説話から類話を探し、『竹取物語』の素材と起源の研究に力を注いで、各種の可能性を探究した。

2.1.1 素材外来説

まず多く挙げられたのは、外国の仏典から来たとの考えである。『竹取物語』に多数の漢語、「蓬莱」「不死薬」などのような神仙思想を表す用語もよく出てくるためで、また仏教の思想が見られる点によっても、仏典に『竹取物語』の素材を探せるかとの考えを持つ学者がいた。仏典伝来説の代表者は契沖、小山儀、入江昌熹、田中大秀、幸田露伴などが挙げられる。契沖は『河社』において『広大宝楼善住秘密陀羅尼』の「序品」という話しが『竹取物語』の素材だと提唱したが、竹中生誕だけが合致しているから、後世の批判は多かった。小山儀と入江昌熹が『竹取物語抄』にて『奈女耆婆経』、田中大

秀が『奈女祇域因縁経』という仏教の物語を挙げたが、異常誕生と多数の貴人からの求婚が似ていても、主人公が竹から誕生する記述がないから、学界に認められていない。幸田露伴が挙げた『佛説月上女経』の説話は『竹取物語』と類似する点が多いとされる。すなわち、短期間で美しい娘に成長すること、光っていること、他人からの求婚があること、父親が娘に自ら夫を選ばせること、十五夜に昇天すること、人生を見透かすことなどである。一方、月上女を育てる父親は元々長者であること、月上女が竹や他の植物からの誕生ではないことの２点は、竹から誕生するかぐや姫が翁を貧乏者から長者にさせることと相違することが明らかである。

次に、中国の漢文典籍から来たとの考えがある。かぐや姫が竹の中から誕生することから、一部の学者は出生の部分に視点を集中させ、中国の古代漢文典籍の中で「竹中生誕」に関する素材を探し始めた。田中大秀は中国の『後漢書』、『華陽国誌』や『幽怪録』などの文献も挙げた。西村真次は『後漢書』の『西南夷傳』篇における「夜郎国」の節が『竹取物語』の創作に著しく影響を与えた最初の素材だと述べた。また、藤岡作太郎は『漢武内傳』による改編された説を提唱した。他に三品彰英が提起した『大東韻玉』巻９の『新羅殊異傳』の話もあったが、ほとんど説得力に欠けるとされている。

2.1.2 国内起源説

外来説に対して、国内起源と主張されている意見もある。一部の学者は仏典と漢文典籍から素材を探究することに賛成せずに、日本に伝承されてきた多数の民話から『竹取物語』と筋立においての類似点を発見して、『竹取物語』は日本に伝承しされてきた説話を素材としているのだと主張している。

まず、羽衣系説話、天人女房譚を素材と見なされた。横井孝（1987:37）の説によると、本居宣長は、羽衣系説話起源説の代表者であり、彼は『古事記』、『日本書紀』のような神話が『竹取物語』の中心内容と合っていると提起した。つまり、一人の男性は他界からの女性（殆どは天人女房）と出逢って、幸せな日々を送るようになるが、その後、女性が離れてゆき、逆に不幸に陥ってしまうというような説話である。他に、阪倉篤義も『竹取物語』が比治山の真名井と伊香小江の説話、鶴妻のような民話から来たことに言及した。三谷栄一は天人女房つまり羽衣形式の中でも、丹後国風土記に見える比治山の真名井の奈具社の説話がもっとも近いと主張された。それに、武田祐吉は『記紀神話』と『万葉集』、『風土記』などの説話が『竹取物語』の素材だとい

う意見を出した。橘純一氏（1937:4）は「かぐや姫は何故竹から生まれたか」によって竹取物語系説話の中に、かぐや姫が鶯の卵から生まれ出たと語るものが少なくないことを説明して、更に白鳥処女型素材説を論証した。

それに、柳田国男は『竹取物語』が日本における伝承されてきた多数の口承文学をもとにして創作したものだと指摘した。「小サ子譚」、「異常誕生譚」と「急成長譚」、「致富長者譚」などの話型も列挙した。かぐや姫も生まれる時三寸だけあり、三ヶ月ほどの間に輝いて美しい姫に成長する。竹取の翁もかぐや姫のおかげで豊かな長者になる。「桃太郎」「瓜子姫」「力太郎」「竹の子童子」「一寸法師」「五分次郎」「田螺息子」などの昔話の主人公たちも、さまざまな形をとってあらわれてくる異常誕生譚であり、また急速に思いがけない成長を遂げる異常成長譚である。更に、異常誕生の子達はほぼ育ててくれた親を財に富ませる。

2.2『竹取物語』と「斑竹姑娘」の対比研究

上記のように、「斑竹姑娘」が日本の学者達に発見される以前、『竹取物語』に巡る類話の研究は止まらずに行われていた。何故「斑竹姑娘」に日中両国の学者が注目したのか、何故『竹取物語』研究の新たなブームを起こしたか、まずこの説話の粗筋から見てみよう。

> この伝説は、チベットの金沙江沿岸を舞台とするもので、朗巴という少年とその母とが我が家の竹藪を大切にしていたが、その地の支配者である強欲な土司がこれを勝手に切り倒して儲けようとした。朗巴親子の泣き悲しむ涙が竹にふりかかると、竹には美しい斑点が出来た。土司は斑竹を残らず持ち去ったが、節の太い一本だけは役に立たないといって遺していった。その竹の中からやがて美しい女の子が現れたので、喜んで斑竹姑娘と名付けた。朗巴と姑娘とは成長して相愛の仲となったが、姑娘の噂を聞いた土司の息子とその仲間四人が求婚してくる。姑娘はそれぞれに、壊れない金の種・砕けぬ玉樹・火鼠の皮衣・燕の巣にある金の卵・海龍の額の分水珠の五つの難題を課し、男達は皆失敗して、朗巴と姑娘とはめでたく結婚することが出来た、というのがその話のあらすじである。[5]

以上は今井源衛によって纏められた「斑竹姑娘」の粗筋だが、「節の太い一本だけは役に立たないといって遺していった。」の部分は田海燕の原本の内容と外れているようだ。原本の流れを忠実に反映された君島久子の訳本に「役人のすきをみて、あの背の低い楠竹をかかえて、がけっぷらにいき、淵の中

に投げ込んでかくした。…楠竹をすくいあげた。」と書かれたように、朗巴は備えてその一節の竹を隠して守った。この説話の粗筋だけざっと目を通しても、『竹取物語』にある主な内容が合致していることが明らかであるから、更に詳しい部分を比べてみる。

2.2.1『竹取物語』と「斑竹姑娘」の類似点

1970年に百田弥栄子が彼女の卒論の『竹取物語の形成に関する一考察』(1972年に雑誌に載せた)に日本の『竹取物語』と似ている中国の民話集の「斑竹姑娘」という説話を発見したことを述べた。そして、二話の求婚譚の部分が対照表で示された。この五人の求婚譚の部分を、百田弥栄子の作成した対照表によって比較してみると、難題の順序が、四と五が入れ代っているだけで、他のモティーフは、かなり共通している部分が多い[6]。百田の対照表は求婚者の名もしくは身分、提示された難題、難題品の性格、難題の所在地、入手した物、入手までの経過、姫の行動、偽物とばれた結果についての対照から成り、初めて詳しく纏められている。西田禎元によって作られた『竹取物語』と「斑竹姑娘」の対照表は百田弥栄子の表の上に二話の構成も纏まっているから、表5の西田禎元の対照表[7]の肝心な部分で、「斑竹姑娘」と『竹取物語』の類似点を考察してみたい。

(表5:『竹取物語』と「斑竹姑娘」の対照表)

『竹取物語』Ⓣ	「斑竹姑娘」Ⓗ
	H0 楠竹物語
T1 かぐや姫の生い立ち	H1 姑娘の生い立ち
T2 貴公子たちの求婚	H2 若者たちの求婚
T3 五つの難題 (ⓕ難題婿説話) (1) 石作の皇子(人物) 仏の御石の鉢(難題)	H3 五つの難題 (ⓕ難題婿説話) ①土司の息子(人物) 撞いても割れない金の鐘(難題)
(2) 車持の皇子(人物) 蓬莱の珠の枝(難題)	②商人の息子(人物) 打ってもこわれない玉樹(難題)
(3) 阿部御主人(人物) 唐土にある火鼠の皮衣(難題)	③役人の息子(人物) 燃えない火鼠の皮衣(難題)
(4) 大伴御行(人物) 龍の頭の五色の珠(難題)	⑤臆病でほら吹きの若者(人物) 海龍の額の分水珠(難題)
(5) 石上麻呂足(人物) 燕の子安貝(難題)	④傲慢な若者(人物) 燕の巣にある金の卵(難題)

T 4　狩の行幸	
T 5　天の羽衣	
T 6　富士の煙	

西田禎元は『竹取物語』をT 1からT 6まで6つの説話、「斑竹姑娘」をH0からH3まで四つの説話に分けた。「斑竹姑娘」には姑娘の誕生全話があるのに対して、『竹取物語』は直接に姫の誕生から始まる。それに、求婚譚の後、『竹取物語』はまた皇帝の求婚説話、昇天説話（羽衣説話）と富士地名の由来説話に進んでゆくのに対して、「斑竹姑娘」は「朗巴と姑娘がめでたく結婚する」話で終わる。二話にも含まれている竹中誕生と難題求婚の部分を見れば、極めて類似していることが明らかである。特に、難題求婚の説話の部分、登場人物の身分、登場の順序と課した難題だけでなく、百田弥栄子が提起した通りに難題品の性格、難題の所在地、入手した物、入手までの経緯、偽物とばれた結果など、殆ど似ているとわかる。その上、類似している部分、つまり貴公子の求婚譚の部分は『竹取物語』全文の約60%パーセントを占めるし、今までの類話には類似度がそれほど高いものはないとされるから、『竹取物語』に関する研究にとって無視できない存在になった。後に、二話の対比研究がブームになったのは当たり前のことだろう。

2.2.2 対比研究時期と特徴

「斑竹姑娘」は日本に伝えられた時期は1960年代だったが、70年代から伊藤清司、百田弥栄子、君島久子達の研究と訳本によって、日本の民話や民俗学などの学者を引きつけ始めたことに従って、『竹取物語』と「斑竹姑娘」に関する対比研究は1970年代から始まったと考えてよいだろう。それから、この二話に巡る激しい論争はどちらが先に創作されたか、どちらが種本であるかの二つであるから、学者達の態度に基づいて、二話の対比研究時期を前期と後期に分ける。つまり、1970年から1980年にかけての対比研究の前期と1980年代以後の後期である。

それでは、対比研究の前期の代表的なものとその特徴から見よう。実は、1970年～1977年の時期は「斑竹姑娘」が日本の学者に発見されたばかりの頃であった。『竹取物語』の起源と種本などの研究に辿っている日本の学界にとって、「斑竹姑娘」のことは霧に覆われている森に新しい道が現れたように、そこが森の出口だろうかという念願も持って、この道に入り込んできて、

対比研究のブームになった。まずは1970年に百田弥栄子が『竹取物語の成立に関する一考察』という卒論を完成した。その後、1971年に指導教員の伊藤清司と連署して『竹取物語源流考』を発表した。更に1973年に伊藤清司による『かぐや姫の誕生』という著作が出版された。それと同時に、中国民話の研究者の君島久子が1972年『チベットの「竹娘説話」と「竹取物語」』、1973年に『金沙江の竹娘説話—チベット族の伝承と「竹取物語」』を発表した後、1977年に「斑竹姑娘」を収録している『金玉鳳凰』を日本語の『チベットのものいう鳥』として翻訳した。この訳本は「斑竹姑娘」研究の大切な資料になった。三人は二話の類似性を主張し、『竹取物語』が「斑竹姑娘」から受けた影響を認めた。後の研究も大体三人の研究を踏まえて進んでいる。1977年に関敬吾も『日本の昔話：比較研究序説』に『竹取物語』が民話による改編で、チベットの「斑竹姑娘」という説話とは同型で、同じ起源から来たものだと推断した。

それに対して、片桐洋一（1977:47-53）は「斑竹姑娘」の中に貴公子が宝物を探すために、船に乗って海で波と戦う内容について、海と遠く離れているチベット民族にとって、自然的に海という構想が出せるのかと「斑竹姑娘」が先に創作されたことに疑問を提出した。しかし、この時期の研究は皆二話の類似点に沸いて、二話の繋がりを論証することに専念していただけあって、そのような反対の声にはあまり賛成しなかった。ほかに、この時期の研究は大体日本側によるもので、中国側からの注目は殆ど見られない。

その後、1980年頃から研究の後期に入った。研究は大体前期と比べると、中国側も「斑竹姑娘」と『竹取物語』に関心を持ち始めたが、全体から見ると、成果があまり多くない上に、殆ど求婚譚の類似点など、つまり日本における前期の研究に留まっているものであるから、参考意義を有している成果は稀である。ここで孟憲仁、李天送と宋成徳の研究を挙げてみたい。孟憲仁（1986:75-79）は『竹取物語』は「斑竹姑娘」と同じ中国の古代のチベット族の文化背景を有していることから論じて、「斑竹姑娘」は『竹取物語』の原型として春秋時代頃日本に伝わったと提起した。李天送は「唐風文化」は日本の「物語文学」が生まれた基礎だと説明した（1988:133-138）。宋成徳（2004:12）はまず田海燕の他の誰一人も「斑竹姑娘」に類似している民話を採集しなかったことから、「斑竹姑娘」は田海燕の個人的な創作の色合いが強い作品だという観点を提起した、更に『竹取物語』と「斑竹姑娘」の間に「竹公主」を

挟むこと、具体的に言えば「竹公主」は『竹取物語』の再話、「斑竹姑娘」の後半の求婚話は「竹公主」の再話であるから、「斑竹姑娘」の原話は『竹取物語』にあると論じた[8]。

そして、この時期、日本側の研究成果があまり出されてこなかったが、研究活動は理性化した。学者達は前期の研究を踏まえて、より具体的な反対と質疑の意見を出した。それに、『竹取物語』と「斑竹姑娘」との繋がりを一切否定する学者もいた。それらのひとりである奥津春雄は前期から後期にかけて継続的に「斑竹姑娘」と『竹取物語』の対比研究に努めている学者である。1973年にもう『金沙江・竹娘説話の問題点』という論文を発表した、それから、1986年に『斑竹姑娘問題の再考の―いわゆる「整理」について』、1990年に『「斑竹姑娘」の背景』を改めて論じた。1990年に著作された『竹取物語の研究――達成と変容』に「斑竹姑娘と竹取物語」という節で二話の関係を説明した。奥津春雄は『金玉鳳凰』に政治的な要素が含まれているほかに、『金玉鳳凰』にある説話が『シティ―物語』などから引用して田海燕による再創作のものだと指摘した。最後に『竹取物語』は「斑竹姑娘」と直接な繋がりがないと纏めた。その結論について、小嶋菜温子も賛成の声を出した。ほかに伊勢光も宋成徳の説に賛同し、「斑竹姑娘」が『竹取物語』から伝承されたものだという結論を自分の研究の前提条件とした。

3. 対比研究における不足点と問題点

以上の研究は『竹取物語』と「斑竹姑娘」を巡って、作者、作品の内容、作成の経緯など各視点から行われたが、まだ幾つかの不足点と問題点があると思う。

特に「斑竹姑娘」が田海燕によって改編されたものだとされた論説に関することである。田海燕が『金玉鳳凰』第二次本冒頭に「讲故事、先作声明」(物語の前の声明）と書かれたことはこの論説の根拠だと見られるから、奥津春雄の説明から見てみよう。

> …とあり、続いて、いまチベットには語り尽くせないほどの新しい物語・新しい人物があるが、自分にはそれらを語る力はないから、『アラビアン・ナイト』にならって、ぼつぼつと『金玉鳳凰』の話をしようと述べ、さらに、自分は原作に自由に手を加え、神仙・仏祖・国王などの権力者を讃えたり、人民を騙すと言ったような「荒唐」な説話を削って、有益で面白い

話をすると言っている。そしてその目的は、読者たち（つまり中国の少年少女）が漢蔵民族の文化交流の関係を理解し、中国を構成する各民族の文化に興味を持つようになること、その結果、漢・蔵両民族の友誼が深まり、両者の文化・伝説が交流することだとしている。[9]

無論、「斑竹姑娘」は『竹取物語』ほどの高い完成度がある説話ではなくても、全体から見れば説話の要素が完備されている。その長さぐらいの説話が「増删」で編著されることはかなり難しいと思う。確かに、田海燕が「根据自己的好恶增删」（自分の好き嫌いに従って、増やしたり、削ったりした）と書いたが、『金玉鳳凰』が出版された時代は中国の特別な政治時代だから、この「声明」は作者の本音で書かれたのか、ただ謙遜の言葉だけなの、あるいは自分を守るための建前なの、今日になって検証するのは難しいようになった。また、「増删」のことについてははっきり田海燕が説明しなかったから、結局「増删」の対象は収集された一部の説話なのか、ある説話の内容なのか勝手に判断できないだろう。それに、この一連の謎が解けるために、田海燕本人あるいは田の資料を受けて継いで『金玉鳳凰』の編著をやっている芻燕と確認してみたら、多分解けるかもしれないと思うが、今まで田海燕と芻燕のところへ交流とか考察とかのような活動をやった記録も見られないのに、「斑竹姑娘」が田による再創作だというような意見は軽率だと言えるだろう。

次に、「斑竹姑娘」は『金玉鳳凰』に収録された説話だから、この説話の成立などを探究するには、単の説話だけを研究するのでは不足で、もっと視線を広く開き、つまり『金玉鳳凰』に収録された説話の全体、ひいては『金玉鳳凰』がまねた『シティ―物語』とか、チベット族の民話集なども考察しなければならない。ほかの「竹娘」類の説話が発見される可能性があると思う。ほかに、『金玉鳳凰』の出版年から考察すると、「斑竹姑娘」の説話が『竹取物語』より遅いという判断は無稽である。『金玉鳳凰』の編著は現代のことだったが、中に収録された作品はチベット族にずっと以前から伝承してきたものである。チベット地域での、民話と民俗学のフィールド調査というやり方で関連性がある説話を収集すべきであろう。

おわりに

以上の説明で『竹取物語』と「斑竹姑娘」との対比研究の現状が大体はっきりしたと思うが、また次のことに言及したい。まずは『竹取物語』と「斑

竹姑娘」の類似度が高い、それは絶対的に偶然のこととは認められないのである。この二話について、学者達がどんなに論争しても、「斑竹姑娘」は『竹取物語』研究にとって無視されない存在で、『竹取物語』の研究に新しい可能性を提供した存在で、『竹取物語』の研究に一定的な位置を占めているものであると思う。それに、今まで「斑竹姑娘」が中国における、『竹取物語』が日本における伝承のことであろうと、日中両国の学者達がこの二話を巡っている対比研究のことであろうと、中国側は見劣っていることは明らかだ。極類似している説話なのに、『竹取物語』が日本文学上で、さらに世界文学上での地位とテスト上の芸術性から見ると、「斑竹姑娘」はどうしても比べ物にならないのだ。この二話に関する対比研究を進むために、二話のテストや芸術性、縁起などの視点のほかに、時代の発展に従って、どのように民族の伝統的な文化を守ったり、伝承したりするのか、あるいは伝統文化をどのように長く生かせるのか、それらの問題も今後の課題になるだろう。

注：

[1] 伊勢光「『竹取物語』の受容から見る、日本と中国の関連」、『日本語日本文学』、11号（2015年）、1-4頁。

[2] 南波浩校注『日本古典全書　竹取物語・伊勢物語』、東京：朝日新聞社、1960年、8-9頁。

[3] 南波浩校注『日本古典全書　竹取物語・伊勢物語』、東京：朝日新聞社、1960年、32頁。

[4] 田海燕、芻燕『金玉鳳凰2』、中国：少年児童出版社、1983年、294頁。

[5] 今井源衛「かぐや姫の面影—「姮娥」と「少女」と—」、『日本文学研究』、23号（1987年）、39-46頁。

[6] 君島久子「金沙江の竹娘説話——チベット族の伝承と「竹取物語」」、『文学』、3号（1973年3月）、114-116頁。

[7] 西田禎元「『竹取物語』と「斑竹姑娘」」、『創大アジア研究』、16号（1995年）、16-19頁。

[8] 伊勢光「『竹取物語』の受容から見る、日本と中国の関連」、『日本語日本文学』、11号（2015年）、1-4頁。

[9] 奥津春雄「「斑竹姑娘」の背景」、『国文学研究』、100号（1990年）、181-191頁。

参考文献：

日本語

1. 伊勢光「『竹取物語』の受容から見る、日本と中国の関連」、『学習院大学院日本語日本文学』、11 号 (2015 年)、1-14 頁。
2. 伊藤清司『かぐや姫の誕生』、東京：講談社、1973 年。
3. 伊藤清司『かぐや姫の誕生』、東京：講談社、1973 年。
4. 今井源衛「かぐや姫の面影—「姮娥」と「少女」と—」、『日本文学研究』、23 号 (1987 年)、39-46 頁。
5. 益田勝実「斑竹姑娘の性格—竹取物語とのかかわりで—」、『法政大学文学部紀要』、88 号 (1988 年)、1-21 頁。
6. 岡崎祥子「『竹取物語』研究—かぐや姫の罪と罰をめぐって」、『岩大語文』、14 号 (2009 年)、12-20 頁。
7. 奥津春雄『竹取物語の研究——達成と変容』、翰林书房、2000 年。
8. 奥津春雄「斑竹姑娘の背景」、『国文学研究』100 号 (1990 年)、181-191 頁。
9. 片桐洋一、「竹取物語は中国種か」、『国文学　解釈と教材の研究』、1977 年、49-53 頁。
10. 川端康成、ドナルド・キーン『竹取物語・The Tale of the Bamboo Cutter』、東京：講談社 .1998 年。
11. 北杜夫、俵万智『竹取物語・伊勢物語』、東京：講談社、2009 年。
12. 君岛久子「金沙江の竹娘説話——チベット族の伝承と「竹取物語」」、『文学』、3 号 (1973 年)、112-126 頁。
13. 阪倉篤義『竹取物語・伊勢物語』、東京：岩波書店、1975 年。
14. 関敬吾『日本の昔話：比較研究序説』、東京：日本放送出版協会、1977 年。
15. 宋成德「『竹取物語』「竹公主」から「斑竹姑娘」へ」、『京都大学國文學論叢』、12 号 (2004 年)、72 － 77 頁。
16. 田海燕編、君島久子訳『チベットのものいう鳥』、東京：岩波書店、1977 年。
17. 西田禎元「『竹取物語』と「斑竹姑娘」」、『創大アジア研究』、16 号 (1995 年)、16-19 頁。
18. 南波浩校注『日本古典全書　竹取物語・伊勢物語』、東京：朝日新聞社、1960 年。
19. 楠竹正雄『日本の神話と十大昔話』、東京：講談社学術文庫、1983 年。
20. 三橋健『かぐや姫の罪』、東京：中経出版・新人物文庫、2013 年。
21. 百田弥栄子「竹取物語の成立に関する一考察」、『アジア・アフリカ語学院紀要』、3 号 (1972 年)、34 － 57 頁。
22. 橘純一「かぐや姫は何故竹から生まれたか」、『国文学解釈と鑑賞』、1937 年、4 頁。
23. 横井孝「『竹取物語』の世界－物語と古伝承の関係－」、『富士市の竹取物語調査研究報告書』、1987 年、37 頁。

中国語

1. 田海燕『金玉鳳凰』、、中国 : 少年児童出版社、1957 年。
2. 田海燕『金玉鳳凰第一冊』、中国 : 少年児童出版社、1961 年。
3. 田海燕『金玉鳳凰 1』、中国 : 少年児童出版社、1980 年。
4. 田海燕『金玉鳳凰 2』、中国 : 少年児童出版社、1983 年。
5. 巴克尔著、原一郎訳『日語与藏缅語同語系論』、上海 : 東亜同文書院版、1941 年。
6. 孟憲仁「春秋時代『竹取物語』原型傳入日本考」、『日本研究』、第 3 期（1986 年）、75-79 頁。
7. 李天送「中国的神話故事対日本小説『竹取物語』的影響」、厦門大学学報（哲学社会科学版）、1988 年、133-138 頁。